

学 位 請 求 論 文 要 旨

茨木のり子・石垣りんの表現空間と戦後女性詩の新境地

平成 30 年 1 月

城西国際大学大学院 人文科学研究科

比較文化専攻

罗 丽杰

要 旨

本論文では、茨木のり子と石垣りんの全作品を読み通し、テーマ別に分析を行い、その全生涯の思想的発展の軌跡を辿りながら、それぞれが詩表現によって構築された表現空間の考察を試みると同時に、両詩人の切り拓いた戦後女性詩の新境地の一端を覗いてみることを目的としている。

二人の詩人は、戦争中で人間形成をし、敗戦になってから 1950 年代にかけて新しく詩壇に登場してきた詩人で、よく戦後女性詩人の代表者としてよく取り上げられている。それにもかかわらず、今まで現代詩研究の分野では、両詩人についての研究がまだ系統だっておらず、その表現空間の解明は、ほとんど研究されずにいるのが実態である。

本研究は、両詩人の詩作品を、詩人の生きた二〇世紀を席卷する実存主義やフェミニズムそれにエコクリティシズムなどの思想と関連付けて分析し、その位置づけ、詩表現の特色と内包、表現技法などの考察を行ったものである。

論文は、序章「近・現代女性文学の展開及び本論文の研究目的、先行研究と研究方法」第一部「茨木のり子の表現空間」、第二部「石垣りんの表現空間」、終章「戦後女性詩の新境地と今後の研究課題」の四つの部分に分けて論を進められている。

序章では、一「近代化と女性表現」、二「主な女性表現媒体——『明星』『青鞥』『女人芸術』」、三「近・現代女性詩とモダニズム」の三つの部分に分けて、近代女性文学隆盛の要因と女性詩発展の歴史、及び戦後女性詩人の表現活動を概観した上で、本論文の研究目的と研究方法を提示している。

次に、本論文の主たる研究内容となる「茨木のり子の表現空間」と「石垣りんの表現空間」の二部は、両詩人の作品に共通した表現領域に基づき、それぞれ五章に分けてその表現空間の考察が行なわれた。

まずは、両詩人はみな戦時体験をしている。戦争から両詩人がかなり影響を受けていて、その詩表現にも顕著に反映されている。茨木は、戦時中の自己を反省し、当時の自分が国家権力や既成の規範で自己喪失状態にあったことに気付かされた。それで主体奪回をするために、何も隠さず、何も恐れることなく、自己の本心に向き合い、人生の再出発と再構築の道を歩み出したのである。本論文の第一部、第一章「戦時体験と主体奪回」では、茨木の詩作品を通して、自己の喪失状態から主体奪回に至るまでの思想葛藤の過程を追いながら、その戦争から受けた影響についての考察を行なった。それに対し、石垣りんは、戦争によって声をなくしてしまった多くの死者や、抑圧されて声として出せないものたちに思いを寄せ、その無言の声に耳を傾けてきた。戦争は人間が引き起こした惨事で、人間だけでなく、周りのすべてにも多大な被害をもたらしている。人間を主体とする思考様式の社会発展に批判の目を持ち、惨状を描くより、未来への危惧に重きを置いて詩表現を繰り広げている。石垣の死者や抑圧されたものを代表とする〈沈黙者〉及び人間以外の生命である〈無言者〉、これらの〈声なきもの〉の視点からの詩作品に対する考察は、第二部、第

四章「人の生きる道——宇宙への跳躍——」という章で具体的に検証した。

茨木と石垣は、みな第二次フェミニズム思想が隆盛している50年代と60年代を生きてきた詩人だけあって、その詩表現には、ジェンダー社会における女性と女性性について思考するものも多く見られる。第一部、第二章「〈女〉から〈わたし〉へ」では、詩作の考察を通して、ジェンダー社会の女性規範が女性への意識上での束縛を暴いている茨木の認識を明らかにした。茨木は、従属と自己犠牲を強要される良妻賢母という女性の規範的な生き方に疑問を投げかけ、従来より形成されてきた〈女らしさ〉という人々の伝統観念を打開しようと、自分らしく生きる姿勢を打ち立てたのである。その一方、石垣りんは、主にジェンダー社会における女性の居場所に究明のメスを入れた。第二部、第一章「〈居場所〉探しから〈一人で生きる空間〉の構築」では、石垣はジェンダー社会の社会構成単位である「家」が持っている拘束性や相互利用の暗い面を暴くと同時に、人間の生存に必要な物質の提供を確保する働く場である〈会社〉が利益獲得の集約体で、働く人間の人間性を無視するだけでなく、女性への抑圧も深刻であると摘発しているのを究明した。この二つの場所で真に自己を生きることが不可能であることを見抜いた石垣は、精神的な居場所、詩作という〈心のふるさと〉に辿り着いたのである。それに、石垣の詩作の中から自己の女性性についての思考も多く窺える。第二部、第二章「「生む」性として個人として——作品に現われる女性性について——」では、その女性性についての認識を考察してみた。石垣は、女性の家庭内労働を、生命の存続にかかわる重大な営為だと高く評価している。しかし、それは決して性別役割を肯定しているのではなく、社会の労働価値の判断基準に異議を唱えているのである。家庭内労働が、経済活動に参加していないばかりに無価値化されているばかりでなく、それに従事している女性の地位をも低くしているのは、ジェンダー社会の仕組みだと指摘している。性差構造を打開するには、女性はその生来備わっている〈産む〉力とジェンダー社会で培われた〈育む〉力を積極的に生かすのが、世界のより良好な発展にいい。自分も「生む」性として個人としてこの世を生きていきたいと主張している。

自己喪失状態にある人には、自己として立つのが急務となっている。戦時中の強権政治、軍国思想及び古くから伝わってきた女性規範を、戦前の家父長制制度の中で育った両詩人は無意識のうちに内面化してきたと思われる。戦後、いきなり民主主義体制に変わり、制度において男女平等が確保され、またフェミニズム思潮の隆盛もあって、両詩人は、戦時中の自分の自己喪失及び自己を生きていないあり方が深く認識できるようになった。従って二人は、自己確立のためにいろいろ模索を始めた。その模索の形跡がどちらの詩作からも見受けられる。各部の第三章では、両詩人の自己確立について考察したものである。茨木はおもに、西洋の実存主義の影響の下で自己確立を実現させようとしていた。サルトルの『ユダヤ人』という本を読んで、戦時中の自分は、〈他者〉化された存在の一人だったと気付かされたのである。その後、自己の〈実存〉を大切に、あらゆる差別的・束縛的・強権的な〈本質〉なるものを拒み、主体的に取捨選択し、何にも〈寄りかから〉ぬ〈個体〉として生きる姿勢を打ち立てた。それに対し、石垣りんは、日本の伝統思想から自己確立

を試みようとしたのである。「家族」や「会社」など大勢の中を生きていて、ジェンダー社会の女性への抑圧と、家父長制家族制度下の「家」の持つ窒息感を、身をもって体験しているからこそ、詩作品に現実社会の苦悩の中を生きた〈鬼ババ〉表象を作り上げたのである。それは、〈鬼ババ〉に化さないと生きられないほどの女性表象である。〈鬼ババ〉の目を用い、女性抑圧の病根は、紛れもなくジェンダーを基本とする社会構造にあると究明したのである。そこで石垣は、この性差社会に付随して、自己の縛りとなるものをすべて切り捨て、一人で生きる〈山姥〉表象を立ち上げたのである。自然界の多くの生命と同様に、生命体の一つとして自力で生きる新しい女性像を提起したのである。

両詩人は自己を確立させた後、さらに他との関わりをテーマとする詩作品を多く書いている。茨木は、五〇歳から韓国語の勉強をし、『韓国現代詩選』の翻訳などを通して、戦時中、同じように〈他者化〉された経験を持つ韓国・韓国人への近付きを試みた。その付き合いを通して、〈他者〉と関わっていく道を自分なりに見つけたのである。それは、自己の確立と保持を確保した上で、〈他者〉を受け入れ、〈他者〉化の拒否とその相互拮抗による自己開拓の道である。一方、石垣りんは、作品の中で戦時中の死者、抑圧された弱者、また人間主体とする発展構造のもとで無視されてきたほかの生命を代表とする、〈声なきもの〉という概念を提起し、生命の大多数を占める弱きものの声を救い上げようと努力してきた。人間社会の権力中心主義、及び人間を主体とする発展様式に疑問を投げかけている。人間は数えきれない生命の中で、ただその一種類である「ヒト」科にすぎないことを見極め、すべての命と共生していくことこそ、これからの人間の生きる道だと主張した。これは、石垣の〈一人で生きる〉空間を構築した後の更なる思想的発展であると言えよう。この〈他〉との関わりを求める中で、茨木は主に人間同士の関係に着目しているのに対し、石垣は、人間だけでなくあらゆる生命との繋がりをも視野に入れている。

両詩人の詩作品は、ともに日常的な言葉を用いながらも深奥な表現世界を作り上げた。本論文では、それぞれの表現空間の第五章において、その表現技法について考察を行った。茨木は、詩の中で〈対話〉構造を作るのに力を入れているように思われる。日常的な「会話」、「自己と他人」、「自分ともう一人の自分」、「対立した二つの事物」などの〈対話〉構造を使用し、物事を関係性の中に置き、対峙的・対照的な存在を立て、議論を戦わせることによって主張を強固なものにし、説得力のあるものになっている。それに、主題の明確さと言葉遣いの正確さに拘るのもその表現の特色とも言える。これらもよりよい〈対話〉が行われるための茨木の努力とも言えよう。それに対し、石垣は、「実用的な詩」を実現させるために、弱者という立場と、日常的な言葉での創作姿勢を終生貫き通した。その詩作品のほとんどは、みな日常的な当たり前のことを切り口に、途中で場面を急転換させる技法を施している。そうすることによって、読者を一変変わった世界へと導かせているのである。そこで表面的な事実と異なる、ものごとの隠れた一面を認識させるのが、石垣の意図したところであるように思われる。

最後に終章では、茨木と石垣表現空間を概括した上で、戦後女性詩人の切り拓いた新境

地の一端を覗いてみた。茨木は、自己の喪失を招いた強権政治や支配思想及び社会規範などによる〈他者〉化を拒み、自分を反体制・反規範の側に成り立たせている。詩作品を通し、何にも「倚りかからず」、まったく自分の感性で究極的な〈個体〉を作り上げた。そして自己確立後、〈他者〉が自己の確認と開拓に必要不可欠であることを認識し、茨木はさらに、進んで自分の内部に〈他者〉を導入し、それとの拮抗によって自己の開拓と創出の道を切り拓いたのである。その一方、石垣りんは、ジェンダー社会における女性の地位に観察の目を向け、「家」も「職場」も自己の生きる場所でないことに気づき、自分で詩作という居場所を見つけた。詩作を通し「鬼ババ」表象を作り、人間社会を深く凝視し、その歪みを暴きながら抑圧の多いジェンダー社会を生き抜いた。更にそこからの離脱をはかり、あらゆる束縛を払いのけ、女として個人として一人で生きる「山姥」表象を作り上げたのである。石垣は自己を確立させた後、戦争中の死者、社会の中での弱者及びほかの生命などと運命を共にし、共生していく姿勢を示している。よりよい世界の創造のために自己の視野を更に宇宙までひろげ、生命体の一つとして生きていこうという意志を固めると同時に、それこそ人間のこれから生きていく道だとも示唆したのである。

このように両詩人の詩作品にはどちらも、体制と個人の対立、ジェンダー社会についての思考、〈他〉との関わりが強く窺える。二人の詩人はみな自己を反体制側に立たせていると同時に、ジェンダー社会の、女性を従属的な地位に陥れる古くから伝わってきた女性規範に強い反感を示し、その束縛を追い払おうとしている。最後に両詩人の到達したのは、自分の性を自分で決め、何にも「倚りかから」ないでまったくの一人で生きていく姿勢である。それに自己の確立を実現させている過程において、その障碍とも促進役ともなる〈他者〉についての認識も深められ、〈他者〉との相互拮抗と共同発展を、自己の確認と開拓の手段とする動きが見られる。

両詩人を代表とする戦後女性詩人の表現空間内では、深い惨事認識、性差構造からの脱出、自己の確立と開拓にかかわる女性としての実存、世界との関わり方、人間世界のありうべきあり方の提示などがかなり見受けられる。これらは、戦後女性詩の切り拓いた新境地の一端を成し、現代女性詩の領域をより深く、より広く拡大させたと思われる。それに両詩人の広まり深まった詩の表現世界は、みな平易な言葉遣いを特徴としている。このような自分の実生活にしっかりと根ざした表現技法は、昔から伝わってきた女性表現者の自己語りと物語の伝統を受け継いできたものと思われる。その駆使によって、現代詩が女性表現者の伝統ある得意となるところへと、表現領域が広げられたとも言える。

本研究は主に、実存主義・フェミニズム・エコクリティシズムなどの思想に触れながら、両詩人の詩作品を分析し、それぞれの表現空間及び戦後女性詩の新境地を考察してみた。しかし、現段階ではこれらの理論に対する理解に限界があるため、分析はまだそれほど行き届いていないと思われる。これから理論研究を更に深め、よりいっそう立ち入った研究をしたい。それに、現代、また多くの新しい思想が生まれた。性的指向も多元化している。両詩人に対する新しい視点からの研究も期待されているし、支配的な単一の性の対立面と

して、抑圧されてきた女性性についての研究だけでは、もう足りなくなっている。もっと多角的な角度に立ち、両詩人の詩表現研究を視野に入れておきたい。更に、作品の背景となる史的研究もまだ十分に行われていなければ、この二人の詩人のほかに、多くの現代女性詩人の研究はまだほとんど手付かずの状態であるのも隠せない事実である。特に、現在、日本の国際化と経済大国化の進展に伴い、新しい世代の女性詩人もたくさん登場している。現代詩には、戦後女性詩人になかった新しい動きも多く見られる。その動きについての考察も必要不可欠である。これらは、みな今後の研究課題とし、引き続き研究に励む所存である。